光のおび

白藤　か子

音楽の先生が、出席番号順で名前を呼ぶ。遠藤さんが「はい」と小さく返事をして、黒板の前に立った。

先生のピアノの音が軽やかに鳴り、遠藤さんが歌い始めた。

花音はスカートのすそを握る。

今日は五年生になってから、初めての歌のテストの日だ。

遠藤さんの歌声がふるえ、顔がみるみる赤くなる。

花音は見ていられなくなり、配布されたプリントに目を落とした。先生からプリントの穴埋めをするよう指示されたのだ。

鉛筆を持つ手が冷えている。心臓の音が聞こえてくる。意識すると、音はどんどん大きくなる。

「遠藤さん、がんばりましたね。じゃあ、次。

岡田さん」

花音は顔を上げた。あわてて席を立つと、イスがいやな音をたてた。

返事をしようとしたが、いつも通り、声が出なかった。

花音は学校で、一度も声を出したことがない。家では話せるのに学校に来ると、のどの奥がつかえて、言葉が出てこなくなるのだ。

黒板の前に立つと、頭がくらくらした。みんなの視線が、体中に刺さる。花音は足元を見た。

ピアノの演奏が始まった。

歌わなきゃ。口を開けなくちゃ。

と、花音は思った。

けれど、口はぴくりとも動かない。しんとした音楽室に、ピアノの音だけが響きわたる。

「岡田さん。おつかれさま。次は川島くんね」

先生の声が遠い。

花音はピアノの前を通り、席に戻ろうとし

た。

「いいの、あれ。歌ってないじゃん」

小さな笑い声が聞こえる。

「岡田さんは仕方ないよ。話せないもん」

花音は顔が熱くなっていくのを感じた。そっと席につき、教科書を立てて顔をかくした。唇をぎゅっとかんだ。

「次、児玉くん」

児玉くんの番が来ると、音楽室はざわめいた。児玉くんは有名な合唱団に入っていると、だれかが話しているのを聞いたことがあった。児玉くんが一人で歌うのを聴くのは、初めてだった。

「はい」

児玉くんはきれいな返事をした。花音は教科書の上から児玉くんを見た。ボーダーのTシャツに紺色のズボンを着ている。児玉くんは黒板の前に立つと、長めの前髪を指でさわり、目にかからないようにした。背筋を伸ばし、足を少しだけ開いた。ピアノの音が鳴る。

児玉くんがすーっと息を吸う。
透き通った声が歌詞をなぞる。言葉一つ一つが声にのる。
花音は目を閉じた。
児玉くんの歌声を聴いていると、きれいなものが次々と浮かんでくる。
光を反射した川。
柔らかな緑の芝生。
宇宙の色が透けているような空。
歌が終わり、花音は目を開けた。児玉くんはまっすぐ前を見ていた。
「とても心のこもった歌声でしたね」
先生の声は弾んでいた。
児玉くんは、恥ずかしそうに浅くおじぎをした。
チャイムが鳴り、先生が号令をかけた。号令が終わると、児玉くんの周りに佐倉さんたちが集まっていた。佐倉さんはクラスの中で、よく目立つ人だ。背が高くてほっそりしていて、中学生ぐらいに見える。

「児玉くんの歌声って、きれいだねぇ。高い声が響いてた」

花音は、自分がその輪の中に入るところを想像する。

「私もすごくきれいな声だなって思った」

もし、花音がそう言ったら、児玉くんはどんな顔をするだろう。びっくりするだろうか。笑ってくれるかもしれない。児玉くんの笑った顔を見てみたいと思った。

「はいはい。おしゃべりは教室に戻ってからにしなさいね。次のクラスの子、もう廊下に来てるから」

先生が児玉くんたちを注意する。少しも怒った声はしていなかった。児玉くんは「こだまー」と、川島くんに呼ばれ、川島くんと廊下に出ていってしまった。佐倉さんたちも散り散りになっていく。

花音も教科書を胸に抱え、廊下へ出た。

休み時間、花音はいつも一人だ。ときどき、女の子たちに呼ばれて、グループに混じるこ

ともある。混じるといっても、みんなの話をただ聞いているだけ。みんなといると、体はここにあるのに、心だけがどこかへ飛ばされてしまったような、そんな気持ちになることがある。

廊下は日が当たり、床が白く光っている。六月にしてはめずらしく、外は晴れていた。窓から射す光の中に、ほこりがいくつも浮いているのが見える。

教室に向かって歩いていると、後ろから男の子たちの笑い声がした。男の子たちは追いかけっこをするように、花音のすぐ横を走り抜けていった。

「ただいま」

家に帰ると、お母さんがキッチンで洗い物をしていた。

「おかえりなさい。今日は学校どうだった？」

お母さんは、学校から帰ると必ず質問する。

「ふつうだよ」

花音は一言伝えると、洗面所へ行った。ハンドソープを泡立て、手を洗う。

お母さんが「ふつう」以外の答えを期待していることはわかっていた。

以前、担任の先生とお母さんが、電話で話しているのを聞いてしまったことがあった。

お母さんは「あの子が友達をつくるには、先生はどうしたらいいと思われますか」と。困ったような声を出していた。

花音は蛇口を止め、タオルで手をふいた。二階へ上がり、自分の部屋に入る。勉強机の横についているフックに、ランドセルをひっかけた。ランドセルの中から筆箱を取りだす。

座卓に立てかけているトートバッグに、筆箱を入れた。トートバッグは黒色で、ピアノのけんばんがデザインされている。トートバッグの中に楽譜が入っているか、確認する。

今日はピアノ教室の日だ。花音は本を読みながら、レッスンの時間になるのを待った。

ピアノ教室は、花音の家から歩いて二十分かかる。家を出てから、川のほうへ向かう。堤防沿いをずっとまっすぐ行き、橋を渡ると左手側に白い家が見えてくる。『香山ピアノ教室』と書かれた黒い看板が、塀に張りつけられている。

花音は表札の下にあるインターフォンを押した。ブザーが鳴ってから数秒待った。

「はい」と、香山先生の声が聞こえた。

「岡田花音です」

「どうぞー」

門扉を開け、階段を三段上がる。階段の周りには鉢植えがあって、黄色や淡い紫色の花が植えられている。

扉を開けて玄関に入ると、香山先生が立っていた。

「花音ちゃん、こんにちは」

香山先生はレースのブラウスに、ロングスカートを履いていた。

「こんにちは」

花音は香山先生の前では、自然と言葉が出てくる。幼稚園のときから、ピアノ教室に通っているからからかもしれない。二人きりだからかもしれない。花音にも、どうしてなのかわからなかった。

レッスン室は、玄関からすぐの部屋だ。扉は開いていて、中からクーラーの涼しい風が流れてきた。

レッスン室の中央には、グランドピアノが置いてある。ピアノはつややかな黒色で、この部屋の主だ。いつも完璧に磨きあげられていて、花音の顔を鏡のように映した。

小窓の下には、テーブルが置かれている。レッスンが終わったあと、ここでよく香山先生とおやつを食べる。

部屋の隅には本棚がある。本棚には楽譜や音楽家の伝記、メトロノームとクッキー缶が置かれている。

花音はテーブルの横に、トートバッグを置いて、楽譜を取りだす。譜面台に楽譜を置い

て、ピアノの前に腰かけた。香山先生が花音のとなりに座った。

「じゃあ、先週の続きからね」

花音はこくりとうなずき、けんばんに指を置く。

けんばんのなめらかな感触が好きだ。

指の重さで沈む感触が好きだ。

音楽で話すかわりに、ピアノが音を鳴らしてくれる。自分の言葉が、一つ一つ音に変わっていく気がする。

曲を弾き終わり、香山先生の顔を見た。

「難しい曲なのに、すらすら弾けたね。たくさん練習したんじゃない？　合格よ」

香山先生は本棚から、クッキー缶を取りだす。中にはシールが入っている。合格すると、好きなシールを選べるのだ。

花音はあじさいのシールを選んで、楽譜に貼った。

「次はね、この曲」

香山先生は楽譜をめくった。

「ピアニッシモから入って、だんだん強くしていきましょう。最初の入りはできるだけ小さくしておくと、後半でしっかり強弱がつくからね」

花音は楽譜を見ながら、最初の音を右手で弾く。この曲を好きになれそうな気がした。

レッスンが終わると、香山先生はおやつを持ってきてくれる。

「プリンをね、いただいたの」

香山先生はテーブルの上に、プリンと紅茶が入った花柄のカップを並べた。紅茶はフルーツの香りがした。

テーブルの前に座り、プリンをスプーンですくって食べた。香山先生は花音の正面に座り、紅茶を上品に飲んだ。

香山先生に児玉くんのことを話したくなった。

「先生、今日ね、学校で歌のテストがあってね、クラスにすごく歌の上手い子がいるの」

香山先生の前では、つい幼い話し方をして

しまう。
「どんな子なの？」
「合唱団に入ってるんだって。声が、なんていうか高くて透き通ってる」
花音は紅茶を口に含んだ。想像していたより、苦くて大人な味がした。
「先生も聴いてみたいな」
香山先生がふんわり笑う。
「聴けると思う。あんなに上手いもん。きっと有名人になるよ」
児玉くんはやっぱり歌手になりたいんだろうか。いつから合唱団に入っているのだろうか。
気づけば、児玉くんのことばかり考えていた。

帰り際、香山先生はいつも玄関まで送ってくれる。花音は香山先生に手をふって、ピアノ教室を出た。
外はまだ日が暮れていなかった。本格的な

夏に向かって、日中の時間が長くなっていた。

今日はうれしいことが三つあった。

課題曲を合格できたこと。プリンがおいしかったこと。香山先生に、児玉くんの話をすることができたこと。

行きよりも軽い足どりで、橋を渡る。橋から川を眺めると、西日で川面が光っていた。

河川敷には、犬の散歩をしている人がいた。甲高い声で犬が吠えている。

見覚えのある後ろ姿を見つけて、花音は目を止めた。ボーダーのTシャツに紺色のズボン。

もしかして児玉くんかもしれないと思った。でも、人違いかもしれない。

花音は橋を渡りきり、堤防沿いをゆっくり歩いた。

かすかに歌声が聴こえてくる。児玉くんの声だ。もっと近くで聴きたいと思った。

土手をくだり、気づかれないように児玉くんに近づく。児玉くんは川のほうを向いてい

る。
「きゃっ」
花音は足をすべらせた。土手からずるずると落ちていく。自分でも驚くくらいに、大きな声が出た。
児玉くんの歌が止まった。児玉くんが後ろをふり向き、花音のところに走ってきた。
「大丈夫？」
花音は恥ずかしくて、立ち上がることができなかった。
「足、ケガしたの？　痛い？」
児玉くんは、ズボンのポケットからティッシュを取りだした。
「血が出てる」
花音はティッシュを受けとり、ひざに当てた。ティッシュにうっすら血がにじむ。
児玉くんが花音のひざを見ながら、心配そうな顔をする。
「立てる？」
花音はまばたきをした。ひざはじんとする

けど、立てないほどではない。
ティッシュをスカートのポケットにしまい、草を払いながら立ち上がった。
花音はトートバッグがないことに気がつき、辺りを見わたした。
トートバッグは斜面に落ちていた。
児玉くんがトートバッグを手に取る。
「これ、岡田さんの？　ピアノの柄なんだ」
花音は、児玉くんからトートバッグを受け取った。
「ピアノを習ってるの？」
花音はゆっくりうなずいた。
「いいね」
トートバッグについた草を、指でつまんで捨てた。児玉くんの顔を見ることができなかった。
「あのさ、忙しかったら別にいいんだけど…もしよかったら、僕の歌、聴いていってくれない？」
花音は顔を上げた。そんなことを言われる

と思っていなかった。
「今日、歌のテストがあったろ？　高音が上がりきらなかった気がしてさ」
児玉くんは、自分の前髪をさわりながら言った。
空はまだ明るい。
花音は草の上に座り、児玉くんを見上げた。
「ありがとう」
児玉くんは目を細めて笑ったあと、真剣な顔をした。足を肩幅に開いて、息を吸った。肩が少し上がる。
児玉くんの声が風に乗る。
歌声は、花音の心の奥の奥まで届く。
空も川も草も、いつもより優しいものに変わる。
「どうだった？」
花音は拍手をした。
「ありがとう。学校のときよりは、調子がよかった気がする」
児玉くんはのどをさすった。

花音が立ち上がって帰ろうとすると、
「僕、ときどきここで歌ってるから、気が向いたら聴きに来てよ。じゃあ、また学校で」
児玉くんが手をふった。花音も顔の前で、ぎこちなく手をふった。

次の日、花音はあいかわらず、学校でだれとも話さずに過ごしていた。休み時間になるたび、お気に入りの本を読んだ。
教室に一人でいても、一人じゃないような気がした。なんだか児玉くんと二人の秘密を持っているような、そんな気になった。
窓の外を見る。児玉くんが運動場で、川島くんたちとサッカーをして遊んでいる。
児玉くんばかり目で追っていた。大勢の中にいても、児玉くんをすぐに見つけることができた。
それから花音は、ピアノ教室の帰りやおつかいの帰りに河川敷へ寄った。雨の日や合唱団の練習がある日以外、児玉くんは河川敷に

いた。
児玉くんは学校で習った歌や外国語の歌を歌った。花音は草の上に座って、児玉くんの歌を聴いていた。
「岡田さんは無口だよね」
あるとき、児玉くんは花音のとなりに座って、そう言った。花音は言葉につまり、ひざを抱えた。
「あーごめん。責めてるわけじゃないよ」
児玉くんは耳の後ろをかいた。
「話さなくても、岡田さんはいつも耳を澄ましていてくれるよね。だれよりも真剣に聴いてくれる」
湿った風が吹いて、草が揺れる。もうすぐ雨が降るのかもしれない。
まだ、降らないでほしいと、花音は願った。
「岡田さんって、将来の夢、決まってる？」
花音は首をかしげた。小さい頃は、いくつも夢があった。夢はふくらんで、いつの間にか消えていった。

「僕はね、あるよ。歌手になりたいんだ」
憧れているという言い方ではなく、必ずなると言っているような言い方だった。
「歌手になってさ、色んな国で歌いたい」
児玉くんは歌を口ずさみ始めた。
花音は、外国のコンサートホールで、ピアノを弾く自分とソロで歌う児玉くんを想像した。花音はドレスを着ていて、児玉くんはタキシードを着ている。ホールはお客さんで埋め尽くされている。
「あっ雨」
児玉くんが手のひらを空に向けた。花音の鼻に雨粒が当たる。
「降りだす前にさ、急いで帰ろう」
児玉くんが立ち上がる。花音も地面に手をついて立ち上がろうとしたが、草で足がすべった。
「岡田さんってけっこうドジだよね」
児玉くんが困ったように笑いながら、花音に手を差しだす。花音は児玉くんの手をとっ

て、立ち上がった。花音よりも大きな手だった。

児玉くんはぱっと手を離した。

「じゃあ、僕こっちだから」

児玉くんは早口で言うと、そのまま逃げるように走っていってしまった。

花音は両手を重ねて、遠ざかっていく児玉くんを見ていた。

朝から雨が降り、湿気でむし暑い日だった。

花音が教室に入ると、ひそひそと声がした。いつもなら花音のことなど、だれも気に留めないのに、その日は違った。

窓際の自分の席につくと、佐倉さんたちが三人で寄ってきた。

「岡田さん、話があるんだけど」

佐倉さんが正面に立ち、花音の机に手を置いた。佐倉さんの両脇には、鈴木さんと松本さんがいる。

「岡田さんが堤防の下で、児玉くんといるの

を、結菜が見たって言ってるんだけど本当？」

佐倉さんのとなりで、鈴木さんが大げさにうなずいた。

「なんていうか、二人の世界って感じだった」

花音はうつむいた。

「でも、岡田さんって話せないんじゃないの？　それとも、児玉くんとだけは話せるってわけ？」

松本さんが胸の前で腕を組む。花音は上履きの中で、指を丸めた。

「なんの話をしているの？」

児玉くんの声だ。

「僕の名前が聞こえたから」

花音は目だけ動かして、児玉くんを見た。

「結菜がね、堤防の下に児玉くんがいるのを見たらしくて」

佐倉さんが、鈴木さんを肩でつつく。鈴木さんはバツが悪そうに口をつぐんだ。

「あー。それさぁ、僕だと思う。岡田さんはピアノの帰りで、たまたま会ったんだ」
児玉くんはすらすらと答えた。
「岡田さんって話せないでしょ。二人で何してたの？」
松本さんが言った。花音はまぶたが熱くなった。鼻の奥がつんとする。
「僕、そこでときどき歌ってるんだよ。岡田さんには聴いてもらってたんだ。人に聴いてもらうの好きだし。よかったら、みんなも聴きにきてよ」
「えーいいの？　聴きにいきたい」
佐倉さんが、鼻にかかった声を出した。
「あとさ、岡田さんは話せないんじゃないよ」
児玉くんがまじめな顔をして、佐倉さんたちを見た。
「岡田さん、なんか嫌な言い方してごめんね」
そう言うと、佐倉さんたちは花音の席から

離れていった。
児玉くんもひらひらと、川島くんたちの輪の中に入っていった。
花音はぎゅっと両手を組んだ。
児玉くんは、間違ったことを言っていない。ピアノの帰りにたまたま会って、歌を聴いていただけだ。
だけど、胸の中がすーっと冷たくなるのはどうしてだろう。
花音は窓をぼんやり見つめる。窓に雨粒がついては流れていった。

ピアノのレッスンが終わったあと、
「歌の上手い子は元気にしてる？」
と、香山先生が言った。
「…元気だと思う」
花音は、香山先生の顔を見ずに言った。楽譜を手にとり、急いでトートバッグにしまった。
「あっ花音ちゃん、今年は発表会、どうする

？」

発表会は毎年、秋にある。幼稚園の頃は出ていたけれど、小学生になってからは一度も出ていない。舞台の上に立つと、指が動かなくなってしまう。

「ちょっと考えてもいい…ですか？」

「もちろんよ。まだまだ時間はあるしね。ねぇ、ゼリーでも食べていかない？」

香山先生がふんわり笑う。

「今日は、早く帰らなくちゃいけなくて…」

児玉くんのことも発表会のことも、これ以上きかれたくなかった。

「そう。また今度いっしょに食べようね」

香山先生が玄関まで送ってくれる。

「それじゃあ、先生さよなら」

ドアを開けると、雨が降っていた。かさ立てから、かさを取りだして開いた。雨粒がかさをたたく。鉢植えの花は、泣いているみたいに見えた。

雨の日、児玉くんは河川敷には来ない。

花音は堤防沿いを歩いていく。川の色は泥でにごっていた。

児玉くんは、外国で歌を歌いたいと言っていた。花音はその横で、ピアノを弾いてみたいと思った。人前に立つのが怖くて、ピアノの発表会すら出られずにいるのに。

涙でじわっと景色がゆがむ。

花音は自分の顔をかくすように、かさをかたむけた。

七月に入って、最初の月曜日。朝の会が終わったときだった。

担任の先生が、

「実は、児玉くんが一学期で、東京の小学校へ転校することになりました」

と、言った。

今まで児玉くんから、転校の話を聞いたことはない。花音は、先生の言っていることが信じられなかった。

教室がいっきに騒がしくなる。みんなが児

玉くんのほうを見た。児玉くんは「へへっ」と照れくさそうに笑っている。

「もう一か月もないじゃん」

佐倉さんの声がした。

「みんな、静かにして。それで、終業式の日に、お別れの会をしたいと思います」

東京ってどこだっけ。新幹線でどのくらいかかるかな。切符代はいくらだろう。

花音はぼんやりと考えた。そんなことを考えている自分が、おかしかった。

お別れの会に向けて、クラスのみんなで児玉くんへ色紙を書くことになった。

色紙は最後のほうに回ってきた。書くスペースは、ほとんど残っていなかった。

〈転校してもずっと友だちだからな〉

川島くんの字が、ネームペンで太く書かれている。

佐倉さんはオレンジ色のサインペンで

〈歌がうまくてかっこいいと思っていました〉と丸っこい字で書いていた。

花音は鉛筆で下書きして、何度も消した。そのせいで、色紙にしわが寄ってしまった。

〈転校してもがんばってください〉

ボールペンで小さく書く。

結局、ありきたりなことしか書けなかった。

終業式の日はあっという間に訪れた。みんなでフルーツバスケットをしたあと、児玉くんは教卓の前に立って、かんたんなあいさつをした。

「みんなと音楽の時間に合唱したり、休み時間にサッカーしたりするのが、すごく楽しかったです。東京に行ってもみんなのこと、忘れません。みんなも僕のこと忘れないでね」

拍手の音が聞こえる。

花音は、まるでテレビの中の出来事のように感じていた。児玉くんが転校したあとのことなんて、想像できなかった。

川島くんが色紙を持って、席を立つ。教卓の前で、児玉くんと向かい合う。

「こだまのこと、ずっと忘れないよ」

表彰状のように、色紙を児玉くんに手わたした。

また、拍手の音が聞こえる。

花音はまばたきをくり返した。

終業式が終わったあと、児玉くんはみんなに囲まれていた。佐倉さんはこっそりスマホを持ってきたようで、児玉くんと写真を撮っている。

花音は輪の中に入らず、じっと見ていた。佐倉さんと目が合う。花音はうつむきながら、ランドセルを背負った。後ろの扉からそっと廊下に出ていった。

家に帰って、手を洗い、自分の部屋に入る。部屋は熱気がこもり、嫌な暑さだった。

ランドセルを勉強机の横にかける。布団の上から、ベッドに寝ころんだ。

目を閉じると、児童くんの歌が聴こえてくる気がした。

そのまま、いつの間にか眠ってしまった。

Tシャツが汗ばみ、気持ち悪くて目を覚ました。窓から夕日が射している。ぼーっとした頭で、児玉くんのことを考えた。

花音は夕日に導かれるように、家の外へ出た。

「出かけるの？　もう夕飯できるのに」

玄関のドアの向こうで、お母さんの声がした。花音は声にかまわず、河川敷に向かった。

河川敷に、児玉くんがいるかはわからない。わからないけれど、花音は走った。

川はオレンジ色に染まっていた。

草の中に、児玉くんはいた。川を見ながら、歌を歌っている。何度か聴かせてくれた外国の歌だ。

花音は土手を駆け下りた。児玉くんがふり返る。

「岡田さん」

児玉くんの後ろで、川はおだやかに流れている。草の匂いがした。

花音は児玉くんの前に立った。
言葉が出てこない。頭の中には伝えたい言葉があふれているのに、どうしても声にならない。
児玉くんは耳の後ろをかきながら
「ここで歌ってたら、岡田さんが来るかなって思ってた」
と、言った。
「歌って」
突然、声が出た。頭の中でぱんと弾けるように。
「岡田さんも、いっしょに歌わない？」
児玉くんが花音を見つめる。児玉くんの瞳は、オレンジ色に反射していた。
「歌のテストの曲がいい」
児玉くんが笑う。
「あの曲？　いいよ」
花音は児玉くんを見た。児玉くんが目を細める。
川面は光のおびのように輝いている。光の

おびの中には、花音と児玉くんだけが映っていた。